

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 8 7	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
A 2-year follow-up study of alcohol consumption and risk of dementia. アルコール消費量と痴呆発症危険性に関する 2 年間の追跡調査	
執筆者	
Deng J, Zhou DHD, Li J, Wang YJ, Gao C, Chen M	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Clinical Neurology and Neurosurgery 2006; 108: 373-383.	
キーワード	
アルコール消費量、痴呆、高齢者	
要 旨	
<p>2 年間における追跡期間中の飲酒量と痴呆の関連に関する調査を高齢者に実施した。対象者は中国人、60 歳以上の老人を 6 地域の住民からランダムに選んだ。応答率は 99%であった。ベースライン時、痴呆診断のために MMSE と DSM-III-R の調査をし、痴呆の可能性のあるものを除き、最終的には、追跡できた 2632 名を解析した。</p> <p>少量から中等度の飲酒者は非飲酒者に比して痴呆の危険度が小さかった。多量飲酒は痴呆の危険因子であった。少量から中等度の飲酒では、アルツハイマー性痴呆は相対危険度が 0.63、血管性痴呆は 0.31、他の痴呆は 0.45 であった。しかし、交絡因子要因を調整した相対危険度は、少量から中等度のビール飲酒者では、有意に高い痴呆危険度を示したが、ワインは、リスクの低下を示した。</p> <p>(コメント：この研究は、少量から中等度の飲酒は痴呆の危険性を低下させたとしているが、追跡期間は 2 年であり、因果の逆転を含んでいる可能性や、ビールとワインの相違は、社会階層等の交絡要因を調整できていない可能性を含んでいると思われる。今後の更なる検証が必要である。)</p>	